

## 『八千頌般若』の発生基盤 ——般若経類の始原にあるもの——

阿 理 生

〔1〕 般若経類に関する今日までの学術研究は数多いが、その社会的文化的な発生基盤についてはまだ十分に解明されていない<sup>1)</sup>。本稿では、般若経類の始原に位置する『八千頌般若』(*Aṣṭasāhasrikā-Prajñāpāramitā* [AP]; 漢訳『道行般若経』〔『道行』〕)〔以下『八千頌』と略〕<sup>2)</sup>の発生基盤を探ってみようと思う。そのための方法として、『八千頌』の主に第1章(漢訳「道行品」)に説かれる一連の比喩(隠喩=暗喩)を手掛かりとしてみたい。

〔2〕 それに先立ち、『八千頌』における菩薩修行のあり方の要点を本文に即して摘出しておこう。その修行の基本は、声聞・独覚とは共通しない所の、一切諸法が捉えられない(*sarvadharmāparigrhīta*)という三昧(AP, p.5, l.5; 『道行』大正蔵8, p.426b1<sup>3)</sup>)すなわち一切諸法を受け取ることのない(*sarvadharmānupādāna*)という三昧(AP, p.7, l.11; 『道行』p.426c18<sup>4)</sup>)にある<sup>5)</sup>。菩薩は一切への無執着を行じつつ、無上正等菩提(AP, p.3, l.30, p.9, l.6; 『道行』p.427a23「作佛」)・一切智者たること(AP, p.5, l.1; 『道行』p.426a24「薩芸若」)<sup>6)</sup>を目標として決して退転することのない者(AP, p.3, l.30; 『道行』p.426a4-5「阿惟越致」)であり、智慧パーラミター(般若波羅蜜)が聴聞・把握・受持・読誦・熟達・宣布されるべき(AP, p.4, ll.5f; 『道行』p.426a8f)である。菩薩はあくまで無執着にして智慧パーラミターについて行くべき(AP, p.5, l.4f; 『道行』p.426a-b)であり、如来の十力・四無所畏・十八不共仏法が満たされないままに〔声聞等のように〕途中で般涅槃することをしない(AP, p.5, ll.19ff; 『道行』p.426b16-17)<sup>7)</sup>で、無量無数の衆生が般涅槃に入らしめられるべき思い(AP, p.10, ll.25f; 『道行』p.427c5-6)を生じて、世間を導き利益する(AP, pp.116-117)。菩薩は一切衆生を父母や子とみなして難行との思いを離れて利益するべきである(〔取意〕AP, p.14, ll.8ff; 『道行』p.428b)という。

以上のような『八千頌』独自の菩薩行の内容が、種々の隠喩を用いて説き明かされている。例えば〔以下紙幅の都合上、必要最少限の資料を呈示〕、

- (a) 「智慧パーラミター(の後)について行きつつ、智慧パーラミター(のなす通りに)あらしめ(=習い)つつある菩薩大士は色・形に執われるべきではありません…もし色・形に執われるならば、色・形の発生について行くのであって智慧パーラミターについて行くではありません…智慧パーラミターを受け容れることなく、智慧パーラミターの中に結合に入ること<sup>8)</sup>もなく、智慧パーラミターに向かって[隊形を]整えそろえることもないからです。(彼は)…一切智に進み出ることはいけません。」(AP, p.4, l.26-p.5, l.1; 『道行』 p.426a)
- (b) 「菩薩大士は智慧パーラミターについて行きつつ一切智者たることに近くなる。」(AP, p.6, l.14; 『道行』 p.426c1-2)
- (c) 「大甲冑(鎧)を着けて大乘で出立し大乘に乗り組んだ菩薩大士」(AP, p.9, ll. 19f [「大甲冑を着けた」と「大乘」との初出箇所]; 『道行』対応欠く。『道行』では「摩訶僧那僧涅」と「摩訶衍」の初出は p.427b 最後行~ c1 [AP, p.10, ll.21f との対応箇所])
- (d) 「(大乘は) 諸のパーラミター [pl.] とともに(すなわち船団をなして) 出立している。」(AP, p.12, l.7; 『道行』対応欠く)
- (e) 「菩薩大士にとって一切諸法に無執着のパーラミターはどれですか…まさしく智慧パーラミターは[船団内の] 全船に関わるもの (sārvayānikī) であり…一切諸法に無執着のパーラミターである。」(AP, p.15, ll.26ff; 『道行』 p.428c 最後行 [意訳]<sup>9)</sup>)
- (f) 「智慧パーラミターは五(善根)のパーラミター先頭に行く(水先)案内人であり周回往復の案内人である。」(AP, p.40, ll.28f; 『道行』 p.434b)

以上に見られる、パーラミター(船団)、大乘(大船)、大甲冑を着けた者(戦士)というこれら一連の比喻辞 (upamāna) から判断して、『八千頌』においては菩薩行が此岸から彼岸への危険を伴う大航海に喩えられていることが知られる。以下少し分析を試みてみよう。

①パーラミター(波羅蜜)の語が〈彼岸に渡るもの(船)の集団すなわち船団〉であることについてすでに筆者は「pāramitā (波羅蜜)の語源・語義について」『印仏研』54-2, 平成18(2006)で解明を試みた。洋上航海は危難に満ちている<sup>10)</sup>がゆえに、船団を組み経験豊かで先見の明ある水先案内人の乗る船を先頭にして進む。各船は水先案内船の操船のままに習いながらついて行かねばならない。『八千頌』における菩薩も、智慧(智慧の教説)に習い学ぶことが目的への必須の要件であり、まさに智慧は船団の水先案内船に類似するから、智慧パーラミター(船団)という隠喩が成立する。布施・持戒・忍辱・精進・禪定という諸徳目<sup>11)</sup>も智慧の先導を必要とするからパーラミター(船団)を比喻辞 (upamāna) とする隠喩が成立するのである。

②マハーヤーナ(大乘; 摩訶衍)は、『八千頌』でパーラミターの説明中に初めて説き出される用語で、量る物差しがない (apramāṇa)<sup>12)</sup> ほどに巨大な船を指す(陸

(148)

『八千頌般若』の発生基盤 (阿)

上の車ではありえない。cf. 上記拙稿)。それは船団を構成する（水先案内船を始めとする）各船に当たる。海上交易を行う商船は、『八千頌』原型成立の頃までに、多量の貨物と多数の乗客を運搬するために大型化していたらしい。『八千頌』と相前後する頃の *Milindapañha* [Mil] (『ミリンダ王の問い』) にも、「百ハスタ（約 43～53m）ある大船ども [pl.] が、重い貨物を有し数百千の貨物を満載して大海を航行する…。」Mil, PTS ed., p.261, ll.29f.<sup>13)</sup> とあり大型商船(団)の航行の事実を伝える。地中海でもローマ帝国の記録によれば、大型に属する船は積載能力約 340t（アンフォラ 1 万個分）とされ、またエジプトのアレクサンドリアからローマの外港オステティアまで穀物(小麦)を輸送する船は例外的で能力 1200t の巨大船だったという<sup>14)</sup>。紀元後 1c 頃の成立とされる *Periplus Maris Erythraei* (『エリュトラ海周航記』)<sup>15)</sup> には、インド洋・ペルシャ湾・紅海における海上貿易の盛行ぶりが窺われる。このような一種の航海案内記の存在自体も多数の商船往来の事実を物語る<sup>16)</sup>。

③大甲冑を着けた[者] (摩訶僧那僧涅) とは、文字通り戦士の装いである。『八千頌』では、この智慧パラミターを聞かず受け入れない諸障害や二乗その他の徒による諸妨害を「魔の諸過失 (doṣa)・諸行為 (karman)」と呼び、菩薩により排除されるべきものとされる<sup>17)</sup>。それは水先案内船に習いついて行くことを拒む水夫の反乱的な行為や商船団の行く手を阻止し略奪を行う海賊行為という内外の過失に比せられる。かの過失排除をなす菩薩は、商船団の各船に乗り組む警護役の戦士に喩えられて、「大甲冑を着けて大乘に乗り組む者」という隠喩的表現となったと解しうる。『八千頌』原形成立の頃はまたアラビア海からベンガル湾に至るまでのインド洋において海賊が横行していたらしい。地中海方面でも海賊は強大なローマ帝国の存立を脅かす程となり、ついに帝国は前 67 年ポンペイウスに地中海域の海賊掃討をなさしめた<sup>18)</sup>。海賊行為は海上貿易の盛行に比例するから、インド洋でも地中海に劣らず海賊の横行に悩まされたに違いない。紀元後 77 年完成の *Plinii Naturalis Historia* (『プリニウスの博物誌』) には、「…同じ岬 (アラビアのシュアグルス岬) を発してインドのシゲルス港<sup>かじ</sup>へ舵を向けるのがより近く、より安全な道筋である…。実際航海は毎年行なわれ、射手の一隊を乗せて行った。というのは、これらの海はひどく海賊に荒されていたからだ。」(第 6 巻, 26 [101])<sup>19)</sup> という記述も見られる。ここには海賊に対する警備のため武装隊が同乗したことが知られる。『八千頌』の「大甲冑を着けて大乘に乗り組んだ者」とは、商船の船主や商人たちが雇い入れた武装警備隊員であることが明確となった。従来その語は、陸地の戦場に赴く戦士と誤解されてきた<sup>20)</sup>。

④それゆえ『八千頌』で菩薩と同置される mahāsattva（大士；摩訶薩）は、先行する『ジャータカ』一般の用例のような「大いなる勇気を有する者 [Bv.]」よりも意味の限定された「大戦士」とみてよいように思われる。「世尊よ、（彼は）大士大士なり」というこれが言われるところの彼は、大甲冑を着けた sattva です (mahāsaṃnāhasaṃnaddhaḥ sa sattvaḥ) (AP, p.10, ll.20f). この sattva は「勇気」でも「衆生」でもなく、「大甲冑を着けた（者）」と同格同義であるから、ヴェーダ語 satvan（戦士）を読者に想起せしめようとする民間語源解釈 (folk etymology) を示す箇所であるに違いない。別の箇所で mahāsattva < mahā + asakta(無執着) (AP, p.10, l.4ff) と示すのも同様の手法である。このことは『八千頌』原初 Prākṛit 本では [Skt.] sattva ; sakta, [Veda] satvan が同一語形だった可能性を暗示する。『八千頌』の mahāsattva は bodhisattva（菩薩）の隠喩的表現であって「大戦士」と訳出されるべきであり、'great being' (E. Conze 訳)<sup>21)</sup> や「偉大な人」(梶山雄一訳)<sup>22)</sup> は、かの隠喩の構造を知らない訳語である。なお、「大いなる衆生集団の中の、大いなる衆生類集の中の agratā をなすであろう。その意味で菩薩大士と言われる。」(AP, p.9, ll.28f) における agratā を「最高のもの（上首）」(梶山訳)<sup>23)</sup> となすのも適切でない。もし菩薩がすでに上首ならば、「仏眼 (buddhanetṛi)」<sup>24)</sup> (AP, p.31, l.21) としての智慧パラミターに導かれる必要もないであろう。菩薩は声聞・独覚と異なり利他をなす者であるから、たとえ船上でも海賊から衆生を守るため衆生の前面・矢表に立ち<sup>25)</sup>、また船の前方監視のため<sup>へきき</sup>舳先を含む最前部に位置する。それゆえ衆生集団の agratā とは「最前位」であって「最高のもの（上首）」ではない。因みに senāgra と言えば、「軍の先頭・先陣・先鋒」である。

『八千頌』に使用された隠喩の意味を知らずしては、その正しい文意を解き明かすことはできない。

[3] 以上の①～④の分析から、『八千頌』における主要な術語であるパラミター(波羅蜜)・マハーヤーナ(大乘)等は、菩薩行の構造を彼岸に到る航海に譬えるための一連の比喩辞 (upamāna) であることが判明する。それらを駆使した隠喩は、『八千頌』にとって決して文体修飾のためではなく、その全体構造に深く関わるという意味で多分に『八千頌』の成立基盤を暗示するものである。『八千頌』の文化背景に商船団(大型帆船から編成)によるインド洋の海上交易の事実が認められるのみならず、実際にその商船団に乗り組んだ者の深い航海体験が『八千頌』の成立基盤になっているように思われる。すなわち、海賊行為(内部反乱を含む)を排除し貨物乗客を護衛する任務をもって商船団の各船に乗り組んだクシャトリ

(150)

『八千頌般若』の発生基盤(阿)

ヤ階級の武装集団の隊員(菩薩としての自覚を有する)による、陸とは全く異次元の海上における斬新な諸体験が、『八千頌』の独創的思想・実践<sup>26)</sup>の発生基盤となった、と推定される。

- 1) Cf. 山田龍城『大乘仏教成立論序説』(昭和34[1959]) pp.171-177; 208-210; 439ff. Edward Conze: *The Prajñāpāramitā Literature* (2nd ed., 1978 [1st ed., 1960]), pp.1ff. 副島正光『般若經典の基礎的研究』(昭和55[1980], pp.374ff). 2) AP = Vaidya ed. (*Buddhist Sanskrit Texts*, No.4), 1960. 『道行』 = 支婁迦讖訳, 大正蔵第8巻 No.224. 3) 「一切字法不受」. 4) 「一切字法不受字」. 5) 「まさにこの三昧を(心に)保ちつつ菩薩大士は速やかに無上正等菩提を現等覚する。」 AP, p.7, ll.12f という. 6) その達成も智慧パーラミターの修得なしにはありえないとする. 特に AP 第10-11章に詳説あり. 7) 声聞・独覚の求道と菩薩のそれとの相違について AP, pp.116-117にも記述がある. 8) *prajñāpāramitāyām yogam āpadyate* (AP, p.4, ll.30f) は、「智慧船団の中に[船団としての]結合に入る」すなわち、「～と船団を組む」ことを意味する. *samaṃ yojayitvā* (AP, p.144, l.22) も「いっしょに[船団を]組んで」の意であろう. 9) 「従般若波羅蜜中生」なお AP の梶山雄一訳(『大乘仏典2 八千頌般若経 I』新訂版, 昭55[1980], p.48, ll.1ff) は正しくない. 三乗は目下の話題と関係ないからである. その解釈は E. Conze: *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*, Calcutta, 1970, p.13, ll.16ff を踏襲したものであろう. AP のこの箇所の「智慧パーラミター」は船団全体の名であらう. それゆえに「全船に関わるもの」である. 「智慧パーラミター」が複数の船から編成された船団名ともなりうることについては、拙稿「*pāramitā* (波羅蜜)の語源・語義について」『印仏研』54-2, 平成18[2006], p.(106) 参照. 10) Cf. AP, p.143, ll.7ff; 『道行』 p.451c7-10, AP, p.144, ll.7-24; 『道行』 p.451c27-p.452a8. 11) AP, p.144, ll.24ff の箇所にて「菩薩大士にとって無上正等菩提を現等覚するために、信があり忍耐があり趣好があり楽欲があり精進があり不放逸があり信楽があり志願があり捨施があり敬い心があり好意があり喜悅があり浄信があり愛情があり不休息があるところの、彼はまた智慧パーラミターによって護られていて、…」とある信等の諸徳目(dharma)は、まさに布施ないし禪定の五つの徳目を別の表現で広説したものとして注目される. 12) AP, p.12, l.5. 13) Cf. 中村元・早島鏡正訳『ミリンダ王の問い 2』初版第4刷, 昭和47[1972], p.324. 船や海の記述は他に第3編第2章参照(Mil, pp.376-381). 14) Cf. George F. Bass (ed.): *A History of Seafaring based on Underwater Archaeology*, 1972, pp.72-73. アティリオ・クカーリ他共著、堀元美訳『船の歴史事典』, 昭和60[1985], p.29. 15) Lionel Casson: *The Periplus Maris Erythraei* (ギリシャ語テキスト・英訳・註記), 1989. Wilfred H. Schoff: *The Periplus of the Erythraean Sea*, 1995 (1st ed., 1912). 村川堅太郎訳註『エリユトラ海案内記』平成5[1993] (初版, 昭和21[1946]). 16) *Jātaka*, No.463 (賢者スッパラカ前生物語)にいう *niyyāmaka-sutta* (水先案内人教本) [PTS 本, p.139, l.10] もそのような類書の存在を暗示する. 17) Cf. AP, p.9, ll.15-20. また AP 第11(māra karma)章や第24(abhimāna)章に詳説あり. 18) Cf. J. マホウスキ, 田辺稔訳『海賊の社会史』昭和50[1975], p.31. 19) 中野定雄他訳『プリニウスの博物誌 第I巻』第

## 『八千頌般若』の発生基盤 (阿)

(151)

5版, 平成7 [1995], p.268. なお海賊の記述は同 [104], p.269にも見られる. インド周辺の航海については他に [57] [58] p.259; [82] [83] p.264. また『エリュトラ海周航記』[上記註15]にも関連記事が多い. 20) 例えば, 平川彰『インド仏教史上巻』第2刷, 昭和54 [1979], p.385. 21) E. Conze 著 [上記註9)], pp.7ff. 22) 梶山 訳 [上記註9)], p.28. 以上の訳解は Haribhadra: *Abhisamayālaṅkāra* *Prajñāpāramitāvyaḥyā*, U. Wogihara ed. (覆刻1973), p.22, ll.13ffに見られる解釈に依ったものであろうが適切でない. 23) 梶山 訳 [上記註9)], p.28. 24) E. Conze 訳 'the guide of the Tathagatas' [上記註9)], p.26, l.-2f や梶山 訳「仏陀の案内人」[上記註9)], p.90 は buddha-netrī (眼) を -netṛ と誤読した結果である. 25) その行為はまたインド社会におけるクシャトリア階級に特有の職務(義務)の一つ「生きとして生ける者の守護 (prajānām rakṣaṇam)」『マヌ法典』1・89 (カウティリヤ『実利論』1・3・6)にも関連している. 26) かの体験と思想・実践との内的関連については別稿を必要とする.

〈キーワード〉 『八千頌般若』, 波羅蜜, 大乘, 大士, 菩薩行, 隱喻

(九州大学大学院非常勤講師)

掲載されなかった諸氏の発表題目 (2)

Buddhānusmṛti in the Chinese Ekottarikāgama

Elsa Legittimo (Munich University, Post-doctoral Researcher)

有部アビダルマ論書における心所法の分類について

一色 大悟 (東京大学大学院博士課程)

《慈》の論理構造再考 —有部六足論を中心として—

佐野 靖夫 (立正大学特任准教授)